

令和6年度

令和の里海づくりモデル事業実施報告書

(森川里海を一体として捉えた藻場再生と
里海教育の充実)

令和7年2月

おおつき里海づくり協議会

目 次

1. 事業の概要	1
1.1 事業名	1
1.2 事業目的	1
1.3 事業内容	1
1.4 発注機関	1
1.5 請負者	1
1.6 事業実施期間	1
2. 令和6年度モデル事業の取組内容及び成果	2
2.1 藻場再生	2
2.1.1 目的	2
2.1.2 実施状況	2
2.1.3 結果	3
2.2 里海教育・エコツアー	6
2.2.1 目的	6
2.2.2 実施状況	6
2.2.3 結果	10
2.3 里海カンファレンス	10
2.3.1 目的	10
2.3.2 実施状況	10
2.3.3 結果	11
3. 今後の課題、取組方針	15
3.1 藻場再生について	15
3.2 里海を維持していくために	16
4. 総括（まとめ）	16

1. 事業概要

1.1 事業名

森川里海を一体として捉えた藻場再生と里海教育の充実

1.2 事業目的

本事業は、環境省事業「令和 6 年度藻場・干潟の保全・再生等と地域資源の利活用による好循環モデル事業を実施することを目的に、高知県西南端の柏島周辺海域における藻場再生と里海教育の充実を図るものである。

1.3 事業内容

実施した事業は下記のとおり

- ① 藻場再生
- ② 里海教育・エコツアー

1.4 発注機関

公益財団法人国際エメックスセンター

1.5 請負者（実施団体）

おおつき里海づくり協議会

1.6 事業実施期間

令和 6 年 5 月 10 日（契約日）から令和 7 年 2 月 14 日まで

2. 令和6年度モデル事業の取組内容及び成果

2.1 藻場再生

2.1.1 目的

柏島南岸の「前の浜」（かつて主要なテングサ場であった場所）と柏島北東部対岸「いくさ水」（山から谷水が流入している場所）の2カ所において、テングサ類の藻場を再生することを目的とする。

2.1.2 実施状況

藻場再生事業実施場所を図1-1に、実施状況を表1に示す。

調査区は柏島南部に位置する1.「前の浜」重ねバエ周辺、2. 柏島北東部に位置する「いくさ水」周辺の2箇所である。

前の浜・いくさ水の2地点でスキューバを用いて、潜水調査を行った。



図1-1 藻場再生事業実施場所

(1) 前の浜

「前の浜」重ねバエ周辺は直径5m以上の大きな岩と、直径20~60cm程度の転石帯であった。5月の時点では岩の表面は無節石灰藻や糸状藻類などの背丈の短い海藻に覆われ、カギケノリが岩一面をおおっている箇所も点在していた。また大きな岩盤に空いた穴にわずかにタワシウニが生息するだけで、その他のムラサキウニ、ツマジロナガウニ、ラップウニ、ガンガゼ類はほとんど確認できなかった（図1-2、図1-

3)。



図 1-2 前の浜 カギケノリに覆われた岩 (水深 3m)



図 1-3 前の浜 糸状藻類に薄く覆われた岩 (水深 3m)

(2) いくさ水

「いくさ水」周辺調査区は水深 1m から 4m ほどで、水面上に達する大きな岩やその下は直径 60cm から 1.5m の転石帯であった。水面に達する大きな岩の側面にはテングサ科のマクサが生えており、水深 1m ほどの浅い岩の上には無節石灰藻が繁茂しているが、水深 3-4m の転石の上にはうっすらオバクサが広がっていた。水深の浅い転石下部にはムラサキウニ、ツマジロナガウニが確認され、少し深くなるとガンガゼが多く見られた。転石上部にはラップウニ、シラヒゲウニなども数個体確認された (図 1-4、図 1-5)。



図 1-4 いくさ水 岩の側面にマクサが生えている (水深 2m)



図 1-5 いくさ水 無節石灰藻に覆われ、僅かにオバクサが点在している (水深 1m)

2.1.3 結果

(1) 「前の浜」は 40m x 50m の範囲を調査した。重ねバエ周辺の調査区はタワシウニが僅かに生息しているのみで、ウニによる捕食圧は低いと考えられたのでウニの駆除は行わず、磯洗いとスポアバッグによる母藻の設置を行った。スポアバッグはマクサの母藻を入れ、5月16日に100個設置した (図 1-6、図 1-7、図 1-8、図 1-9、図 12-10、図 1-11、図 1-

12)。

2025年2月2日、磯洗いとスポアバッグの効果を確認するために潜水調査を行ったところ、磯洗いをした箇所の数カ所でテングサ類の芽生えを確認した。これまでのスポアバッグのみの設置では確認できなかったが今回確認できたことで、テングサ類の胞子が着生し生長するための基質を新たに作ることの有効性が示唆された。今後は確認できた箇所を継続して観察すると同時に、次年度以降も今回の方法でテングサ場の再生を目指していきたい。



図 1-6 前の浜調査エリア



図 1-7 磯洗い（ワイヤーブラシで付着物を取り除く）



図 1-8 磯洗いにより付着海藻等を除去したあと（岩の下の白くなっている部分）



図 1-9 スポアバッグに母藻のマクサと錘の石を入れたところ



図 1-10 磯洗い終了後、テングサ類が生えそうな場所にスポアバッグを設置



図 1-11 2025年2月 テングサ類の芽生えを確認

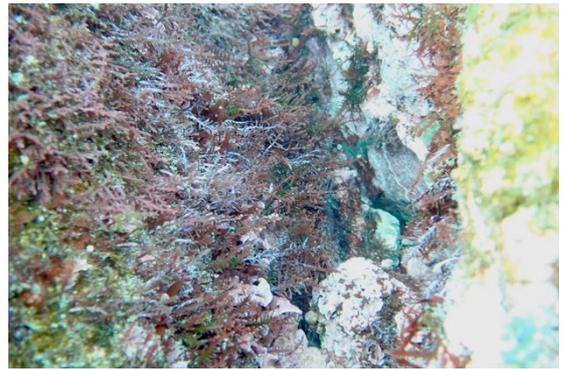


図 1-12 2025年2月 テングサ類の芽生えを確認

(2) 「いくさ水」ではマクサおよびオバクサ（何れもテングサ類）の自生が見られたので、スポアバッグ方式はとらず、捕食者であるウニの駆除を行った。5月と11月の2回スキューバによりウニの駆除を行った。5月のウニ駆除数はムラサキウニ 355 個体、ツマジロナガウニ 122 個体、ガンガゼ 201 個体であった。11月はムラサキウニ 97 個体、ツマジロナガウニ 25 個体、ガンガゼ 78 個体であった。2月の潜水調査ではマクサは岩の斜面、オバクサは転石の表面に僅かに確認された。

表 1 藻場再生活動実施状況

実施日	実施内容	確認概要
令和6年5月12日	藻場再生場所状況把握潜水調査およびウニの駆除	「いくさ水」(50mx20m)と「前の浜」(50mx40m)の海藻相調査を行った。 「いくさ水」では岩の斜面にマクサが、転石上部表面にオバクサが確認された。 「前の浜」では岩の表面は無節石灰藻や糸状藻類などの背丈の短い海藻に覆われ、カギケノリが岩一面をおおっている箇所も点在していた。 「前の浜」にはタワシウニが僅かに生息するだけで、その他のムラサキウニ、ツマジロナガウニ、ラップウニ、ガンガゼ類はほとんど確認できなかったため駆除は行わなかった。 「いくさ水」でウニの駆除を行った(ムラサキウニ355個体、ツマジロナガウニ122個体、ガンガゼ201個体)。
令和6年5月13日 ～14日	潜水作業による磯洗い	「前の浜」にて磯洗い(海藻の付着基盤となる岩の表面をワイヤーブラシでこすり、付着している他の藻類等を取り除く)を行った。
令和6年5月15日	潜水作業でマクサ母藻採集、スポアバッグ製作	「いくさ水」周辺エリアからテングサ類を母藻として採集し、スポアバッグの制作を行った。
令和6年5月16日	潜水作業によりスポアバッグ設置	「前の浜」の藻場再生エリアに潜水作業にてスポアバッグを設置した。
令和6年11月28日	潜水作業によりウニ駆除	「いくさ水」で、ムラサキウニ97個体、ツマジロナガウニ25個体、ガンガゼ78個体を駆除した。
令和7年2月2日	藻場再生状況把握潜水調査	「いくさ水」、「前の浜」でテングサ類の着生状況調査を行った。

2.2 里海教育・エコツアー

2.2.1 目的

海離れが進みつつある若年層に海への興味関心を持って貰い、海との関わりを自分ごと化してもらいにつなげ、あわせて里海教育により森川里海のつながりが実感できる教育を目指す。

2.2.2 実施状況

(1) 里海教育

森川海のつながりを学ぶため、地元大月小学校6年生を対象に「海の中の森づくり」授業を行った。山の学習では人工林に必要な山の手入れと、土の中の栄養分を作り出す土壌動物の観察を行った。間伐の結果廃棄される枝葉を利用した、アオリイカの人工産卵床づくりとダイバーや漁業者といっしょに行う設置作業。産卵床に無産み付けられた卵の観察と飼育。生まれた稚イカをシュノーケリング体験の際に海へ放流するところまでを行った。2月末には振り返りの事後学習とアオリイカの解剖実習を行う予定。山形県鶴岡市立大山小学校の児童にも出前授業を行い、大山小学校にもアオリイカの卵を持って行き孵化まで飼育観察を行った。大月小学校と大山小学校の児童は今回の出前授業の縁で、オンライン交流会が実現した(図2-1、図2-2、

図 2-3、図 2-4、図 2-5、図 2-6、図 2-7、図 2-8、図 2-9、図 2-1、図 2-11、図 2-12、図 2-13)。



図 2-1 山の学習
(放置林の林床観察)



図 2-2 山の学習
(間伐林の林床観察)



図 2-3 山の学習
(NHK 高知 こうちいちばんより)



図 2-4 土壌動物の観察
(NHK 高知 こうちいちばんより)



図 2-5 間伐材の枝葉でアオリイカの人工産卵床づくり



図 2-6 産卵床を漁師やダイバーと海に投入



図 2-7 子ども達を船に乗せて産卵床設置 (NHK 高知 こうちいちばんより)



図 2-8 メッセージカードの付いた産卵床に産み付けられたイカの卵



図 2-9 大月小学校の玄関に設置した水槽でアオリイカの卵の飼育



図 2-10 大月小学校の玄関に設置した水槽でアオリイカの卵の飼育



図 2-11 孵化して餌のアミ類を補足する稚イカ



図 2-12 海の出前授業 宿毛高校
柏島の浜から持って行った微小貝の観察



図 2-12 鶴岡市立大山小学校での海の出前授業



図 2-13 大山小学校にもアオリイカの卵をお届け 大山小の児童も産卵床に取り付けるメッセージプレートを送ってくれました

(2) エコツアー

座学だけでなくフィールドワークを通じて五感を使った体験・実感するためのツアーを開催した。ツアーでは楽しく遊び学ぶために必要な、水辺の安全管理やセルフレスキューをまず最初に行う。

通常のエコツアーだと价格的にも地元の子どもたちは参加しにくいいため、地元の子どもたちにも地元の海の素晴らしさを実感してもらうため、無償で開催しているのが海の寺子屋である。子ども

サマースクールを8月に1回（3泊4日）実施した。地元小学生を対象にした海の寺子屋を8月に1回開催した（図2-14、図2-15、図2-16、図2-17、図2-18、図2-19、図2-20、図2-21）。



図2-14 子どもサマースクール
船釣り体験



図2-15 子どもサマースクール
海に浮かぶ絨毯で休憩中



図2-16 イトヨリ GET!



図2-17 四万十川での川
エビ採り その場で素揚



図2-18 出来たてをお昼
ご飯に



図2-19 海の寺子屋
セルフレスキューの練習



図2-20 海の寺子屋
ペットボトル救助法練習



図2-21 海の寺子屋
シュノーケリング体験

表2 エコツアー・プログラム一覧

<p>・お魚博士と行く柏島子どもサマースクール（3泊4日） 2024年7月31日～8月3日実施 開催場所：高知県幡多郡大月町柏島周辺海域および四万十川支流黒尊川 対象：小学3年生～高校3年生まで 定員：15名程度 内容：柏島の海の環境レクチャー、クリアカヌー、ボートシュノーケリング、クルージングで湾内の養殖施設見学や海岸漂着ゴミの観察、イルカウォッチング、船釣り&釣った魚を捌く、ビーチコーミング、マイクロプラスチックワークショップ、海ごみレクチャー、ナイトサファリ（夜の海の生き物観察）、郷土料理ランチ、ところてんづくり体験、四万十川で川遊び、ビーチクラフト、BBQなど</p>
<p>・海の寺子屋 in 柏島「海辺の安全講習とシュノーケリング体験」 開催場所：高知県幡多郡大月町柏島周辺海域 対象：地元宿毛市・大月町在住小中学生、保護者 定員：20名程度 内容：セルフレスキュー等の安全講習をしたのち、SUP、シュノーケリング体験</p>

2.2.3 結果

今年度は地元大月小学校の他、高知市立五台山小学校、高知県黒潮町立上川口小学校、高知県立高知国際中学校、高知県立宿毛高校、山形県鶴岡市立大山小学校、温海小学校で海の出前授業を行った。その他県内外で5回講演を行った。

柏島の海の魅力を体験・実感してもらうための子どもサマースクールを8月に1回（3泊4日）実施した。また地元小学生を対象に海の寺子屋を8月に1回開催した。

2.3 里海カンファレンス

2.3.1 目的

『第4回里海カンファレンス 2024in 大月』は、「高知のはしっこ柏島 ～海を耕しくらしを守る小さな島の大きな挑戦～」をテーマに開催する。

2000年に大月町柏島で開催した「さとうみシンポジウム」から24年、「里海」というモノの考え方は日本の「里海」から世界の「SATOUMI」へと浸透しつつある。日本国内においても、藻場や干潟、サンゴの保全・再生、地域資源を利活用した里海づくりを行う地域が増えている。

本カンファレンスは、太平洋と豊後水道に面し、その数1,150種を超える日本一の魚類相を誇り、藻場再生等による海洋環境保全や里海教育を行っている高知県幡多郡大月町にて開催し、「自立・自走を目指す里海づくり」、「里海教育・人材育成」そして、昨今の大型台風、地震等の自然災害に対するリスクマネジメントが不可欠なことから「里海と災害リスクマネジメント」の3セッションを行う。

里海づくりに取り組む上での疑問や課題について意見交換や情報共有を行い、今後の里海づくりのさらなる進展を目指すことを目的とする（図3-1）。

2.3.2 実施状況

開催日：令和6年11月16日：発表、パネルディスカッション

令和6年11月16日：エクスカージョン（柏島）

会場：大月町農村環境改善センター

対象者：全国の里海関係者、一般100名

参加費：無料、エクスカージョン（希望者のみ）は8,000円

主催：（特非）黒潮実感センター、（特非）里海づくり研究会議、（公財）国際エメックスセンター

後援：環境省中国四国地方環境事務所四国事務所、大月町、瀬戸内海環境保全知事・市長会議、NHK高知放送局、RKC高知放送局、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、高知新聞、朝日新聞、読売新聞

2.3.3 結果

里海カンファレンス2024in大月は、11月16日に大月町農村生活改善センターにおいて、1. 自立・自走を目指す里海づくり、2. 里海教育・人材育成、3. 里海と災害リスクマネジメントの3セッションを行った。里海教育・人材育成では地元大月小学校6年生児童が発表した。

本カンファレンスには、東は宮城県から西は福岡県までの130名が参加した（図3-2、図3-3、図3-4、図3-5、図3-6、図3-7、図3-8、図3-9、図3-10、図3-11）。

11月17日は柏島においてシュノーケリングとクリアカヌーのエクスカージョンを行い、17名が参加した。昼食は柏島の郷土料理であるこうし飯、ブリうどん、つき上げを提供した。

この模様は11月18日の高知新聞（図3-12）、読売新聞（図3-13）とNHK高知放送局こうちいちばん（ニュース）で紹介された。

第4回 里海カンファレンス 2024 in 大月

高知のはしっこ柏島 海を耕しくらしを守る ～小さな島の大きな挑戦～

『里海カンファレンス2024 in 大月』は、『高知のはしっこ柏島 海を耕しくらしを守る～小さな島の大きな挑戦～』をテーマで開催します。

2000年に大月町柏島で開催した「さくらみシンポジウム」から24年。「里海」というモノの考え方は、国内外に広く浸透し、日本国内においても瀬田や千瀬、サンゴの保全・再生、地域資源を活用した里海づくりを行う地域が増えています。日本の「里海」は今や日本から世界の「ISATOUMI」へと浸透しつつあります。現場においても「令和の里海づくり」モデル事業を実施するなどにより、全国の里海づくりの取組を支援しています。

里海カンファレンス2024 in 大月は、太平洋と豊後水産に面し、その数1,150種を超える日本一の魚類相を誇り、環境再生等による海洋環境保全や漁業と海洋レジャーとの共存、里海教育、地域の活性化等を行っている高知県高知郡大月町にて開催し、「自立・自走を目指す里海づくり」、「里海教育・人材育成」そして、昨今の大型台風、地震等の自然災害に対するリスクマネジメントが不可欠なことから「里海と災害リスクマネジメント」の3セッションを行います。

里海づくりに取り組む上での疑問や課題について意見交換や情報共有を行い、今後の里海づくりのさらなる進展を目指します。

**参加者
募集中**
11月10日(日)
〆切

日程

1日目 令和6年 11月16日(土) 10:00～17:30

2日目 令和6年 11月17日(日) 8:30～13:40

場所

大月町農村環境改善センター(高知県高知郡大月町弘見2018-1)
(対面開催のみ)

■11月16日(土):発表、パネルディスカッション、懇親会
■11月17日(日):エクスカーション(柏島)

参加費

無料 ※懇親会および柏島でのアクティビティ体験は有料。裏面をご覧ください。



大月町農村環境改善センター

会場へのアクセス

土佐くらしお鉄道「宿毛駅」より、高知西南交通バスでアクセス可能ですが、便数が少ないため、タクシーのご利用をおすすめします。(約20分、約4,000円)



会場: 大月町農村環境改善センター

〒780-0801 大月町内タクシー会社
バス時刻表

主 催: (特非)黒潮実感センター (特非)里海づくり研究会 (公財)国際エムックスセンター
後 援: 高知県中地区地方環境事務所 環境事務所、大月町、南予圏域環境保全知事・市長会議、NHK高知放送局、RCC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、高知新聞、朝日新聞、読売新聞

(1日目) 11月16日(土) 10:00～17:30 (開場:9:30)	(敬称略)	(敬称略)
開会	10:00-10:15 歓迎挨拶: 大月町 副町長 水谷 友和 来賓ご挨拶: 環境省 水・大気環境局 海洋環境課長 水谷 好洋 趣意説明: (特非)黒潮実感センター 理事長 神田 優	今宮 友和 水谷 好洋 神田 優
自立・自走を目指す里海づくり	10:15-10:35 環境省 水・大気環境局 海洋環境管理室 室長補佐 森川 政人	森川 政人
	10:35-10:55 海辺づくり自立自走する大月町～漁民たちの知恵と工夫～ (特非)海辺づくり研究会 理事長 古川 恵太	古川 恵太
	10:55-11:15 アマチ再生から海洋教育事業への展開～継続と自走を目指して～ (特非)里海づくり研究会 理事・事務局長 田中 文裕	田中 文裕
	11:15-11:35 持続可能な里海づくり ～自立自走に向けて～ (特非)黒潮実感センター 理事長 神田 優	神田 優
12:15-13:20 休憩	※お弁当が必要な場合は要予約、750円(予定)。当日、現金でお支払い願います。	
里海教育・人材育成	13:20-13:40 海の中の森づくり(大月小学校)と学び 大月町立大月小学校 6年生	
	13:40-14:00 学校教育を支える人づくり～海洋教育(バイオ)スクールプログラム事業の事例から～ (公財)笹川平和財団 海洋政策研究所 研究員 高倉 美帆	高倉 美帆
	14:00-14:20 島であることを教育魅力化 (一財)島前ふるさと魅力化財団 教育魅力化事業部 リーダー 宮野 進也	宮野 進也
	14:20-15:00 総合討論 (座長: 高倉 美帆)	
15:00-15:10 休憩		
里海と災害リスクマネジメント	15:10-15:30 震災復興と里海づくり (一社)サステナビリティセンター 代表理事 太田 彰浩	太田 彰浩
	15:30-15:50 犠牲者ゼロを目指す黒潮町の地震・津波対策 黒潮町役場 情報防災課 課長 村越 淳	村越 淳
	15:50-16:10 大月町における南海トラフ地震対策について 大月町役場総務課 危機管理室 室長 吉岡 謙友	吉岡 謙友
	16:10-16:30 里海の豊かな暮らしを残すために「いつい」「いもし」を繋げる地域づくり～ 高知大学 地域協働学部 教授 大槻 知史	大槻 知史
16:30-17:10 総合討論 (座長: 神田 優)		
17:10-17:20 総評 (特非)里海づくり研究会 理事長 松田 治	松田 治	
17:20-17:25 閉会宣言: (公財)国際エムックスセンター 副理事長 小松 隆久	小松 隆久	
17:25-17:30 写真撮影		
閉会	18:30-21:00 会場: みやさき 希望者のみ・要予約 (定員60名) 参加費: 6,000円(学生3,000円) 当日、現金でお支払い願います。	
懇親会		
(2日目) 11月17日(日) 8:30～13:40 (希望者のみ。定員30名※先着順) ※各費用は当日、現金でお支払い願います。		
エクスカーション(柏島)	8:30 柏島 黒潮実感センターに集合	
	8:30～11:30 ショーキングまたはクアアス～ 希望者のみ・要予約 各体験料: 8,000円	
	12:00～12:40 昼食 ※柏島郷土料理。希望者のみ・要予約 1,200円(予定)	
	12:40～13:40 柏島 島内ガイド後、解散	

申込方法

申込方法 Googleフォーム (<https://forms.gle/h8HQZ7RwvyyaPLp5A>)、または右記のQRコードから申し込みください。申込期限は11月10日(日)です。

申込期限 11月10日

お申し込み後、1週間以内に入申し込みメールが届かない場合は、お手数ですが、secret@emecs.or.jp までご連絡ください。

(お問合せ先)

公益財団法人 国際エムックスセンター

兵庫県神戸市中央区臨海海岸1-5-2 人と防災未来センター東館5階

TEL: 078-252-0234 E-mail: secret@emecs.or.jp

HP: <https://www.emecs.or.jp>

講演者 (敬称略)

森川 政人 環境省 水・大気環境局 海洋環境管理室 室長補佐

環境省 水・大気環境局 海洋環境管理室 室長補佐。
「令和の里海づくり」モデル事業などにより現場における里海づくりのさらなる発展に取り組む。2009年4月に自然系技術官として環境省入省。本省では外来生物対策、国立公園利用推進、福島第一原発の放射性物質対策を担う。現場では霧島錦江湾国立公園や中部山岳国立公園の管理を担当。2023年8月より現職。

古川 恵太 特定非営利活動法人 海辺づくり研究会

1963年東京生まれ、早稲田大学・大学院で土木工学(水理学)を学び、運輸省港湾技術研究所(現・国土技術政策総合研究所)、豪州海洋科学研究所、海洋政策研究財団(現・笹川平和財団 海洋政策研究所)等を経て、現在に至る。専門は沿岸生態系の保全・再生・創出、沿岸域総合管理、市民課産・体験活動、環境教育。特に沿岸域総合管理の実践のために国内外の多くのプロジェクトに関与してきた。

田中 文裕 特定非営利活動法人 里海づくり研究会

NPO里海づくり研究会 理事・事務局長。1953年大阪生まれ。1979年に岡山県に入社し、2008～2011年に水産課長。岡山県大月町柏島に「島が丸ごと博物館」という構想の、海のフィールド・ミュージアムを立ち上げ、2008年単身島に移住し、「里海」を提唱。2002年NPO法人黒潮実感センターを設立。島の自然と人の暮らしが両立する、持続可能な「里海」づくりに挑戦している。2012年第5回海洋立国推進活動・研究発表を継続中。沿岸環境関連学会連絡協議会共同代表、地域活性化推進師(内閣府)、みなとまちづくりマイスター(一般社団法人ウォーターフロント協会)。

神田 優 特定非営利活動法人 黒潮実感センター 理事長

1966年高知生まれ。東京大学農学部農学生命科学専攻修士課程修了。農学博士。専門は魚類生態学。四国の吉野郡、高知県大月町柏島に「島が丸ごと博物館」という構想の、海のフィールド・ミュージアムを立ち上げ、2008年単身島に移住し、「里海」を提唱。2002年NPO法人黒潮実感センターを設立。島の自然と人の暮らしが両立する、持続可能な「里海」づくりに挑戦している。2012年第5回海洋立国推進活動・研究発表を継続中。沿岸環境関連学会連絡協議会共同代表、地域活性化推進師(内閣府)、みなとまちづくりマイスター(一般社団法人ウォーターフロント協会)。

大月町立大月小学校 6年生

今回発表する大月小学校6年生27名は、1年生時 アサガオ、秋のものみつけ、2年生時 町たけん、いもほり、3年生時 アサギマダラ、遅路通、4年生時 マグロ、土佐備前(大月の魅力)、5年生時 晩柑(ばんかん)、専水(いちごり)、柏島(大月の魅力再発見)、6年生時 海の中の森づくり(アオリイカの産卵床づくり)、大月町自然SDGsについて学習してきました。

高倉 美帆 公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所 研究員

公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所 研究員
公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所 海洋政策実現部 研究員。(前職 東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター 特任研究員) 海洋教育バイオスクールプログラム事業担当者として、全国の地域や学校へ足を運びながら、教育現場の支援を行っています。

宮野 進也 一般財団法人 島前ふるさと魅力化財団

1987年静岡県浜松市生まれ。大学卒業後、ニトリホールディングスに勤務。10年前にセルフ島流しで島流しに移住し、里海センタースタッフ(公衆衛生)として、持続可能な「里海」づくりを提唱。現在は、離島島前高校コーディネーターも兼任し、学校経営から草刈りまでコーディネーター業務に従事。

講演者 (敬称略)

太田 彰浩 一般社団法人サステナビリティセンター 代表理事

民間機関の研究者を経て、フィールド密着型の教育を志し、2000年に南三陸へ移住。箱もの施設再生により、年間数千人の交流人口創出。東日本大震災後は、町職員として壊滅した水産業の復興に奔走するとともに「循環型でレジリエントなまちづくり」を目指した。南三陸町バイオマス産業都市構想の実現に貢献。「保良海心」といわれる「ましまし」を掲げる南三陸町の取り組みを支援し、後里海をフィールドとした人材育成を進めるとともに2018年4月サステナビリティセンター設立。2024年6月より東北大学大学院科学研究科客員教授として、NP地点(ネイチャーポジティブ)発展社会実現拠点)の人材育成に関するターゲットリーダーを担い、地域からネイチャーポジティブな世界の実現を目指す。

村越 淳 黒潮町役場 情報防災課 課長

1973年生まれ。高知県黒潮町、高知県立中村高等学校卒。1992年旧大月町役場入庁。2017年に情報防災課消防防災係、2020年情報防災課課長補佐、2022年より現職。

吉岡 謙友 大月町役場 総務課 危機管理室 室長

大月町役場総務課課長補佐 兼 危機管理室長 兼 住宅管理係
1978年大月町生まれ。県外の大学を卒業後、2003年に帰郷し大月町役場に入庁。企画部門において地方創生や公共交通、ふるさと納税、移住促進などの業務に長く従事。2021年から総務課危機管理室長として、南海トラフ地震対策や事後復興まちづくり計画の策定に取り組んでいる。

大槻 知史 高知大学 地域協働学部 教授

高知大学 地域協働学部/防災推進センター 危機管理分野 教授
1976年京都生まれ。2004年立命館大学政策科学研究科博士後期過程修了。博士(政策学)。
立命館大学歴史都市防災研究センターなどを経て、2009年から高知大学教育研究部地域協働教育部門准教授。2014年より高知大学地域協働学部准教授。
2022年より高知大学地域協働学部教授。
専門分野は、コミュニティ防災論、防災教育論、ソーシャルキャピタル論。

龍尾 圭司 水産大学校 元理事長

林崎漁協顧問、日本伝統食品研究会会長、NPO里海づくり研究会副理事長。京都大学博士課程から兵庫県の林崎漁協企画研究室長に就任。漁場環境調査やノリ養殖指導、資源管理、漁業普及と尽力。明石を中心に漁業と漁業文化の発信を続け、イナゴづくし、節分の恵方巻の仕掛け。2000年京都精華大学人文学部環境社会学部教授、学部長。2009年水産大学校理事長に就任し、2021年まで代表を務めた。総合海洋政策本部等として政府の海洋政策にも尽力。

高倉 美帆 公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所 研究員

講演者プロフィールをご覧ください。

神田 優 特定非営利活動法人 黒潮実感センター 理事長

講演者プロフィールをご覧ください。

図 3-1 第4回里海カンファレンス 2024in 大月 チラシ



図 3-2 自立・自走を目指す里海づくり
パネルディスカッション



図 3-3 里海教育・人材育成
大月小学校児童の発表



図 3-4 里海教育・人材育成
パネルディスカッション



図 3-5 参加者



図 3-6 里海と災害リスクマネジメント
パネルディスカッション



図 3-7 関係者記念写真



図 3-8 エクスカーション 船で移動



図 3-9 シュノーケリング



図 3-10 クリアカヌー



図 3-11 郷土料理ランチ

2024.11.18 08:21

豊かな里海どうつなぐ？ 持続可能な取り組み学ぶ 高知県大月町

高知新聞社

SHARE

クリップ

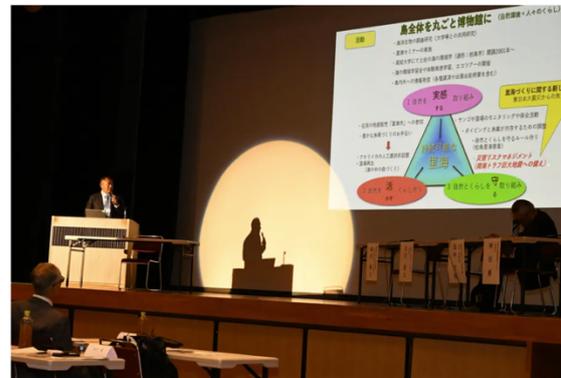
森と川、海のつながりについて考える「里海カンファレンス」が16日、大月町の町農村環境改善センターで開かれ、県内外から集まった約120人が持続可能な里海づくりに向けた取り組みなどを学んだ。

黒潮実感センター（同町柏島）や公益財団法人「国際エメックスセンター」（神戸市）などの主催。里海づくりに尽力するNPO法人の代表や行政職員らが登壇し、岡山県で40年続く藻場の再生事業などの事例発表のほか、「里海教育・人材育成」「里海と災害リスクマネジメント」のテーマで意見を交わした。

黒潮実感センター理事長の神田優さんは、国内有数の魚種を誇る豊かな柏島の海で「(魚やイカの産卵床となる)藻場が磯焼けで失われている」と指摘。地元ダイバーや漁業者とアオリイカの人工産卵床設置を20年以上続けていると紹介した。神田さんの指導を受けている大月小の6年生7人は、海と山のつながりを知る学習やイカの卵観察などの取り組みを発表した。

里海と防災に関する討論では、巨大な防潮堤などのハード整備と里海の環境保全のバランスが議論に。宮城県南三陸町を拠点に活動する団体役員は「(行政や住民が)対立するのではなく、同じ方向を向くために、災害が起きる前からコミュニケーションをとることが大事だ」と強調した。

来場者からは「人間を守るために自然をどこまで変えていいのか。自然の上に自分たちの生活が成り立っているという、里海づくりの観点を踏まえた議論が活発になってほしい」との意見が出ていた。(坂本出)



里海づくりの方策や人材育成のあり方などについて考えた「里海カンファレンス」(大月町弘見の町農村環境改善センター)

図 3-12 11月18日高知新聞掲載記事

里海づくり 課題と実践語る 大月でカンファレンス



里海づくりについてのパネルディスカッション（大月町で）

「第4回里海カンファレンス2024 in 大月」が16日、大月町弘見の町農村環境改善センターで開かれ、参加者が豊かで美しい里海づくりについて意見を交わした。

3部制のパネルディスカッションが行われ、「自立・自走を目指す里海づくり」の部では、環境省海域環境管理室の森川政人室長補佐が、同省が目指す里海づくりとして「沿岸の生物多様性の維持だけでなく、過疎や高齢化などの課題を解決し、自然資本を守りながら活用する『ネイチャー

ポジティブ（自然再興）』の取り組みが必要」と説明した。

同カンファレンスのホスト役・NPO法人黒潮実感センターの神田優理事は「柏島全体を丸ごと博物館にしたい」と述べ、ダイバーと漁師が良好な関係を築くために続けているアオリイカの人工産卵床づくりを紹介。「共存のためにも白黒つけないルール作りが必要」とした。また、岡山県備前市日生地区でのアマモ場再生についても報告された。

このほか、「里海教育・

人材育成」の部では、町立大月小学校の6年生が参加した人工産卵床づくりや海ごみ回収などについて発表。「里海と災害リスクマネジメント」の部では、南海トラフ地震などで深刻な被害を受ける里海の災害対策について語り合った。

3. 今後の課題、取組方針

3.1 藻場再生について

今年度行った藻場再生の取り組みにおいて、特に前の浜での磯洗いとセットで行ったスポアバッグによる播種では、昨年度までの取り組みと異なり初めてテングサ類の芽生えが確認されたことで藻場再生に有効である可能性が示唆されたことが大きな成果であった。ただ、昨年度は事業開始時期が8月と遅かったため、母藻による播種の適正な時期ではなかったことも考えられる。来年度以降、前の浜への播種時期を5-6月の胞子放出のタイミングに合わせることに同時に、既に岩をおおっている他の藻類をワイヤーブラシでこそげ落とし裸地を作り、効果的にテングサの胞子が付着しやすい環境を整える「磯洗い」を行い、テングサ藻場の再生を目指していきたい。

藻場再生の一環として、現在柏島港内の南側の浮棧橋にのみ生息しているアントクメの増殖を試みるため、アントクメのスポアバッグも作成し、港内の岸壁周辺に投入する。アントクメは湯がくとワカメよりも歯ごたえがあり美味なため、柏島の新たな特産品になる可能性がある。

竜が浜に元あったホンダワラ科の温帯種イソモクは環境の変化等で現在はなくなっており、ガラモ場がなくなって久しいが、港内の別の場所にはヒイラギモクやマジリモク等の南方系ホンダワラ類が繁茂しているところがあり、その移植も検討する。地球温暖化に伴う海水温の上昇など海洋環境が大きく変化している今、これまでの温帯種の再生は難しく、暖かい水

温に適した南方系ホンダワラ類の分布拡大に向けて順応的対応も検討したい。

3.2 里海を維持していくために

昨今、全国的に若年層の海離れが深刻化しており、海への興味関心が薄れていると言われている。近年地球規模での気候変動に伴う海水温の上昇や、災害の脅威、海洋酸性化、海洋プラスチックごみなど海にまつわる様々な課題が山積している。そうした課題に関する海洋教育ももちろん重要ではあるが、まずは海や海の生き物に興味を持って貰い、好きになってもらう事からはじめる必要がある。11月16日に開催した里海カンファレンスでも議論された、海洋教育・里海教育のさらなる推進が喫緊の課題である。次年度以降も引き続き即効性はないが森に苗木を植えるように、教育の力で少しずつ着実に次の世代を育てバトンを渡す活動に注力する。

持続可能な里海づくりのための活動拠点としての、黒潮実感センターを持続的に運営できる活動費をいかに捻出するか、助成金や補助金にできるだけ頼らず自主収益事業の割合を上げながら、様々なネットワークや行政、企業とも連携して活動が維持できる体制をつくっていききたい。

4. 総括（まとめ）

今年度は当初400万円の事業規模での活動を考え計画を立てていたが、急遽100万円に減額された。しかし、なんとか活動の成果を上げるためにかんがりの持ち出しをせざるを得なかった。藻場再生では昨年度までの活動でテングサ藻場の再生が海水温の上昇が妨げとなっているのか、台風による波浪の影響でテングサ藻場全体が岩から剥ぎ取られ流出してしまい、その後胞子が入ってくる条件が整わなかったことでテングサ藻場が消失したのかが不明であった。今回の試験で必ずしも温度条件だけではないことが少し判明し、希望が見えてきたことが非常にうれしかった。

私たちはテングサを里海のシンボリックな存在と位置づけている。テングサは定期的に人手が入り摘み採られることで伸長が促されると同時に、伸びすぎると台風等の大波により根こそぎ剥ぎ取られ、その地からなくなると他地域から胞子が運ばれてきにくくなかなか復活してこない。引き続き今年度の方法を持続させつつ、経過を見守っていききたい。テングサ藻場を再生し、漁業者による採藻漁を復活させ、柏島特産のところてん産業の火を消さない。それこそが里海の復活にもなる。

今後は地域住民だけでなくもっと多くの人にも関心を持って貰い、里海を自分ごととしてもらい共に活動をしていけるよう、ネットワーク構築や関係人口の拡大に努めていきたい。